

# 小型機導入で市場開拓

## 九洲日東

### 社内外への広報活動にも注力

九州一円で建築や土木の基礎工事を手掛ける九州日東(福岡市中央区、榎博史社長)。創業から四十数年、複数の大型杭打機を保有して取り組む施工から一歩踏み出し、新たに導入した小型機を使った市場開拓にチャレンジしていくという。2月に土木広報大賞2021(土木学会主催)の特別賞を受賞したことを契機に、社内外での広報活動にも一段と力を入れる同社を取材した。

1976年に創業して、今年で47期目。技術開発者でもあった先代が手掛けたケーシング工法や特殊ヤツトコ工法といった特許技術を生かした精度の高い基礎杭埋設工事、ソイルセメントを用いた山留め工事(SMW)などを、メーカーを主とする取引先から声がかかった九州全域の現場で年間40〜50件施工する。代表現場には、本社から

も近い場所で行われている。今年で47期目。技術開発者福岡・天神のビル建てで替え促進策「天神ビッグバン」のプロジェクトや大学施設などの建築事業、調整池、橋梁などを整備する土木事業での基礎工事がある。先代が掲げた方針にも沿って、超を投資。「大型機だけでなく、小型機が必要という社内提議がなかった」。小型杭打機は、2月に納車された小型杭打機には1億5000万円を投資。「大型機だけでなく、小型機が必要という社内提議がなかった」。小型杭打機は、2月に納車された小型杭打機には1億5000万円を投資。

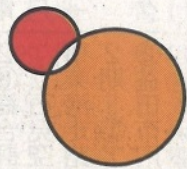
た新規事業開拓に挑戦して、いくこととした。◇◆◇

大型杭打機を4台保有して取り組むこれら事業に加えて今回、小型機を導入し

大型杭打機を4台保有して取り組むこれら事業に加えて今回、小型機を導入し

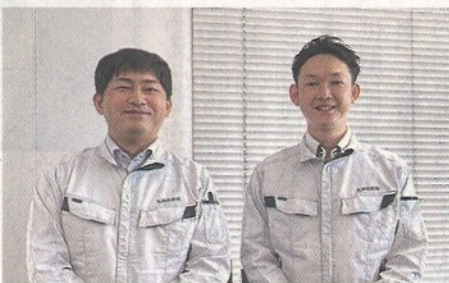
## スコープ

### 地域発



導入した小型杭打機(写真はいずれも九州日東提供)

## 特許生かした高精度施工が売り



吉田取締役(左)と榎氏(右)

小型機導入の効果に期待を越えてより良い現場づくりを目指す。

◆◆◆  
本業での新たな挑戦に取り組む一方、土木施工を手掛ける企業として広報活動や社内コミュニケーションにも力を入れる。榎氏は入社以来、創業時から所属するベテラン社員と、ここ10年くらいで入社した若手との間のコミュニケーションの醸成が、会社の維持発展に不可欠と感じていた。そこで2020年1月に福岡県久山町で開いた同社安全大会の第2部として「現場のこれからを描く」をテーマに社員同士が話し合う場を設けた。

数人で囲むテーブルごとの対話を一定時間が過ぎた段階でメンバーを入れ替える「ワールドカフェ」と呼ぶ方式を取り入れ、世代を超えてより良い現場づくりを目指す。超えてより良い現場づくりはどう取り組めばよいかについて対話。最後に社員それぞれに対話の成果を提示してもらった。

「現場で働く職人さんたちが現場をより良くするために、現場の思いを持っていることを改めて確認できた」。その一方で「会社が変わっていくのはこれからだ」という「継続して取り組んでいくことが必要」。その口をそろえる吉田取締役と榎氏は会社として初の試みを今後も継続していけば、社員同士が互いを理解して同じ方向に向かっていくことにつながるかと考えている。

小型機導入によって、ニーズも高い羽根付き鋼管杭の施工に取り組めるようになるほか、大型機では対応が難しい狭あいであったり、高さ制限があったりする現場での施工も可能となる。小回りが利き、燃料消費量も少ない環境に配慮した施工も行えるようになる。

安全大会第2部での取り組みは、同年8月に創刊した社内報にも掲載。15歳でこの業界に飛び込み、同社の現場を引っ張ってきたベテランオペレーターも社内報に取りあげ、社内外のコミュニケーション醸成の一助とした。

創業以来、大型機一本で取り組んできた施工の幅を広げることで「利益率の向上にもつながるのではないか」。吉田竜之助取締役は、



安全大会第2部で現場の「これから」を話し合った(20年1月)

◆◆◆  
新型コロナウイルスの感染拡大もあり、対話の成果を具体化する活動には至っていない。収束期を見据え、対話の場を再度設けるほか、土木の魅力や業界内外にPRする活動も企画していきたいと語る。土木広報大賞特別賞を一過性の「栄誉」で終わらせず、建設業の魅力発信につなげていこうと同社は、引き続き試行錯誤を重ねていく構えだ。